

色々とおかしいアイン
クラッドに召喚された
ので、全力で生き残る
事にします

カトポン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

あ……ありのまま今、起こった事を話すぜ！

お、俺は学校の昼休みにラノベを読んでいたと思っていたら、いつの間にかインクラッドの第1層の主街区の《はじまりの街》にいた。

な……何を言ってるのか分からねーと思うが、俺も何をされたのか分からなかった……。

頭がどうにかなりそうだった……。

催眠術だとか超スピードだとか、そんなチャチなもんじゃあ、断じてねえ。もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

という訳で、オリ主が何故かアインクラッドにやって来たお話です。

目次

第1層攻略期

第1話 注) これはRTA小説ではご

ざいません ————— 1

第2話 GMが茅場じゃないってマジ

で言うてます? ————— 7

第3話 《ホルンカ》での初クエスト

11

第1層攻略期

第1話 注) これはRTA小説ではございません

さ、さて、状況を整理しよう。

今、俺が立っているのはヨーロッパにありそうな大きな広場。前方には大きな宮殿があり、上を見上げれば空のように見える石蓋が広がっている。

さらに言えば、俺の視界の左上には『T a k u t o』と俺の名前とHPバーがある。しかも、HPバーの下には／ L V . 1と表示されていた。

因みに、さっきまで学校の昼休みで本読んでいたんだぞ。こんだけ、冷静なのを褒めて欲しい。

「まさか、此処はアインクラッドなのか？」

いや、馬鹿な事を言っているのは分かっているが本当にそう思ってしまうくらいそっくりなのだ。

もし此処がアインクラッドだとしたら俺が立っているこの場所は《はじまりの街》の広場。それなら目の前にある宮殿も黒鉄宮だと説明がつくし、HPバーがあるのも納得出来る。

試しに右手の人差し指と中指を揃えて下に振ると・・・

「マジか・・・」

効果音と共にSAOと同じメインメニューウィンドウが開いた。この時点で此処がアイコンクラッドだというのがほぼ確定した。

ならば、RTAじゃないがさつさとスキルを選択し初期所持金から武器やら回復アイテムを買ってレベリングをした方が良い。

そう結論づけた俺はメインメニューからスキルタブを開く。初期スキルスロットの数は2つ。特に迷ったりせず《片手直剣》と《索敵》をスキルスロットにセットした。

《片手直剣》はメインアームを片手剣にするからであり、《索敵》はソロで活動するには必須スキルだからだ。もう1つ、ソロでの活動には必須スキルである《隠蔽》があるが、それはとある理由で3つ目のスキルスロットが解放されてからセットする予定だ。尚、ソロの必須スキルを迷う事なく選択した理由は「ああ、そういう事か」と察してくれ。

もう、メインメニューには用が無いので、メニューを閉じて武器とアイテムを買いに行こうとした時だった。

突然、通知音のようなものが鳴りメッセージが送られてきた。誰が送ってきたのかは分からないがメッセージの内容は次のようなものだった。

『午後6時よりオープニングセレモニーを行います。それまでご自由にお過ごしください』

・・・は？こんなメッセージ原作には無かったんだが？

まあ、オープニングセレモニーが何なのかは想像出来るのでレベリングに励む事しよう。現在の時刻は午後1時5分なので後、4時間55分ある。

早速、初期所持金を使い武器屋でスモールソード(片手直剣)を2本、余った金は回復ポーションを買い戻すだけ買って、俺は《はじまりの街》を出た。

《はじまりの街》を出たら、そこはもう圏外。HPが0になった瞬間ゲームオーバー。ゲームのように復活する事もなく俺は死ぬ。

「スウー・・・ハアー・・・」

深呼吸し、意識を切り替える。

目の前に某RPGのスライム相当のモンスターである青いイノシシ、フレンジー・ボアが出現した。

俺に気づいたフレンジー・ボアが突進してくるが、それを躲けて片手直剣のソードスキル《スラント》を繰り出した。

俺の放った《スラント》は、フレンジー・ボアのHPをギリギリではあったが削り切り、HPが0になったフレンジー・ボアは、結晶片となって散っていった。

「次」

今はまだ、多くの人が始まりの街に居る。つまり、フィールドに出現するモンスターを狩り放題。レベリングにはうってつけである。

「次」

フィールドに出現したフレンジー・ボアーを一撃でぶつ倒し、次のモンスターを探そうとした時だった。

再びメッセージが届いたので、周りにモンスターが居ない事を確認し、メッセージを確認する

『チュートリアルを受けますか？』

はい／いいえ

』

またも原作にはないメッセージ。差出人は不明だが、たぶんさっきのメッセージと送った奴は同じ奴だろう。

さて、メッセージの方だが勿論『いいえ』を押す。チュートリアルなんか受けてる暇あつたらレベリングだよレベリング。

そんな訳で、ひたすらモンスターを倒し続けた。午後5時50分でレベル4に到達。もう、レベルは上がらないので近くの岩に腰掛けて、メインメニューを出すと、ステータスタブを開く。

SAOはレベルアップ時にステータスで上がり、更にレベルアップ時に得られたステータスアップポイントを筋力か敏捷力に割り振る事で自身のステータスを強化していく。これがSAOの仕様だった。

一方、この世界ではレベルアップ時にステータスが上がり、ステータスアップポイントで割り振るのは変わらない。だが、割り振る事が出来る項目がSTR、AGL、VIT、DEXの計4つになっているのだ。

STRは筋力を表している。これをあげると攻撃力が高くなる他、重い武器を持てたりストレージの容量を増やす事が出来る。

AGLは敏捷性。これをあげると身体能力に影響し、素早く動いたり剣速が速くなる。これにガン振りすれば水の上を走る、なんて芸当が出来るかもしれないが、俺はやらない。

VITは丈夫さや持久力を表している。これをあげる事で防御力が上がる他、最大HP量を増やす事が出来る。

DEXは器用さを表しているが、影響するのは命中率だ。これをあげる事でクリティカル補正にも影響するので割と重要なスキルだ。

俺のステ振りは、STRとAGLを中心にあげ、VITを少し上げている。DEXに関しては、俺の戦闘スタイルがクリティカルを狙わずとも高い攻撃力で短期決着を目指

すダメージディーラーにするつもりなので完全に切り捨てている。また、防衛よりも回避を主体としているのでVITも切り捨てて良いのだが、最大HP量が増えるのとモンスターの攻撃を全て回避するのは不可能なので少しだけ割り振っている。

「SAOと全く一緒って訳ではないんだよね……」

基本的にこの世界はSAOとほぼ同じだ。だが、さっきの仕様だったり、原作にはないメッセージが届いていたりと細かい所で違っていたりする。

原作がこうだったから、と原作の情報は鵜呑みにせず、あくまで情報の1つと思つて行動した方が良いのかもしれない。まあ、その知識も大したことないのですぐに使え物にならなくなる可能性が高いが。

「後5分ちよいか」

今日中にはあのクエストをクリアし、報酬のあの武器を手に入れておきたいが、あのクエストはクリアするのにかなりの時間を要するだろう。

ならば、休息出来る時においていた方が良い。

ポーつと前方の景色を眺めながら、時が来るのを待つ。

そして、午後6時になった瞬間俺は青い光に包まれ、フィールドから転移するのだつた。

第2話 GMが茅場じゃないってマジで言うてます？

午後6時となり《はじまりの街》へ強制転移された。より詳しく言えば、黒鉄宮の近くにあるあの広場にだ。

俺以外にも多くの人が広場に居た。恐らく、アインクラッドに居る全ての者達が強制転移されるんだろう。

そして、このオープニングセレモニーだが正直、真面目に聞くつもりはさらさらない。今のうちに始まりの街を抜け出して、次の拠点である《ホルンカ》に向かいたい。

そうと決まれば、人の間をすり抜けて《はじまりの街》を抜け出そうとするが・・・
「出られねえのかよ」

見えない障壁に邪魔されて広場から出る事が出来なかった。

こっちは早く《ホルンカ》に向かいたいんだよ。とつと広場から出させると見えない障壁に悪戦苦闘していると

「レディース&ジェントルメン！ボーイズ&ガールズ」

突然、この世界には場違いな声が聞こえた気がした。

アレかな？さっきまでの狂ったようにやってたレベリングの疲労が取れなくて幻聴

でも聞こえたのかな？

「これより、オープニングセレモニーを行います。今暫くお待ち下さい」
幻聴じゃないとしたら、もう色々とおかしい。

此処はアインクラッドじゃなくて、ネズミリーゾートだったか？

「皆様、アインクラッドへようこそ」

今度は女性の声が聞こえてくる。茅場さーん、居たら早く出てきてください。なんか、勝手にオープニングセレモニーとかやってますよー。

「いきなり召喚されたと思うので、皆様困惑していると思いますので状況を説明したい
と思います」

さらつと言ってるが、いきなり召喚と言っているのでナーヴギアを使ってフルダイブ
している奴は誰も居ないって事なのか。

それって、原作キャラが誰も居ないなんて事に・・・嘘だろ!? 誰がクリアさせるんだ
よ！

「此処はアインクラッド。100層からなる浮遊城でございます。皆様がいるのは最下
層である第1走の主街区である《はじまりの街》です」

人の間を抜けながら女性の声を聞く。当初の予定では、もう《はじまりの町》をこつ
そり抜け出して、《ホルンカ》に向かっているのだが、障壁のせいで広場から出れないわ

色々とおかしい事になっていくわけで結局、オープニングセレモニーを聞いている。

ただ、すぐに行動出来るよう、ホルンカ方面の出来るだけ人が少ない所に待機するが。「皆様が、元の世界に戻る方法はただ一つ。100層に到達し、そこに居るボスを倒す事だけです」

周りはザワザワとしているが、俺としてはまあ、そうだろうなと思っていたので騒いだりしない。

「そして、この世界で皆様の視界の左上に表示されているであろうHPが0になった瞬間、皆様は死にます」

「嘘だろ」とか「そんな馬鹿な」とかの声が聞こえてくる。

まあ、いきなりアインクラッドに召喚されてHPが死にますとか言われたらそんな反応するのも納得だ。俺も事前に知らなかったらそんな反応をするだろう。

「それでは、皆様100層目指して頑張ってください」

その言葉を最後に、女性の声が聞こえる事はなかった。

多くの者がパニックとなり、《はじまりの街》は騒然としていた。

俺は当初の予定通り、《はじまりの街》を出て《ホルンカ》へと向かう。同じクラスの奴等も召喚されている可能性は高いが、仲が良い訳じゃないので誘ったところで拒否されるどころか耳も傾けないだろう。そうじゃなかったら、スキルスロットにセットする

スキルをもう少し迷うだろうし、なんなら一人でレベリングしようとか考えない。

「頼れるのは自分だけ……か……」

気を引き締めて、俺は《ホルンカ》へと走り出すのだった。

第3話 《ホルンカ》での初クエスト

俺は《はじまりの街》を飛び出し、《ホルンカ》へと向かっていた。

既にレベル4になっているので、進行の邪魔になるモンスターだけ倒して、走り続ける。

《はじまりの街》の北西ゲートを出て、広い草原を突っ切り、深い森の中の迷路じみた小径を抜けた先に目的地の村である《ホルンカ》に到着した。

狭いが《はじまりの街》同様、圏内である。宿屋と武器屋、道具屋もあるので拠点として十分に機能する。

《ホルンカ》に辿り着いた俺はまず、武器屋に向かう。オープニングセレモニーが始まる前まで、一人でレベリングしていたのでストレージにはかなりの素材アイテムが貯まっている。だが、生産系スキルを上げるつもりはない。レベル上げるとしてもスキルスロットに余裕が出来たらーなので、それらをまとめて売却。レベリング時に稼いだのと、さつき売却した分のコルを使ってそこそこ防衛力の高いレザーコートを購入。

購入時に表示される即時装備ボタンに躊躇わずタッチ。初期装備の白い麻シャツと灰色の厚布ベストの上に、茶革のハーフコートが装備された。

「こんなハーフコートでも安心感はずもんだな」

武器屋の壁に設置された大きな姿見を見ながら呟く。

鎧とかを装備すれば、もっと安心感があるのだろうが、動きにくそうだし、たぶん絶望的に似合わないのでやめた。短期決戦型ダメージディレイラーを指摘している理由の一端もそこにある。

武器屋を後にし、隣の道具屋に駆け込むと回復ポーションと解毒ポーションを買いただけ買う。

この買い物で所持金が0になってしまったが、今から受けるクエストで嫌でも所持金が増えていくのでそこまで心配しなくて良い。後、武器を買い換えなくて良かったのかと思う人も居るかもしれないが、買い換えなかった理由は勿論ある。

《ホルンカ》の武器屋には、《はじまりの街》で買ったスモールソードよりも威力が高いブロンズソードという片手直剣が売っている。しかし、耐久度の消耗が早いわ植物モンスターの腐食液にも弱いわで数を狩るのならスモールソードの方が良いのだ。

とはいえ、いつまでも初期剣のままではいられない。道具屋を後にし、急いで村の奥にある一軒の民家へと向かう。

民家に入ると、台所に居た《村のおかみさん》といった感じのたぶんNPCの女性が振り向き、俺を見て言った。

「こんばんは、旅の剣士さん。お疲れでしょう、食事を差し上げたいけど、今は何も無いの。出せるのは、一杯のお水くらいのもの」

「それでいいですよ」

おかみさんに認識出来るようにはつきりした発音で答える。おかみさんがNPCだったら、はつきりした発音で答えないと認識してくれないからな。今からおかみさんがNPCかどうか検証しても良いのだが、また此処に来るだろうからその時にすれば良いだろう。

おかみさんは、古びたカップに水差しから水を注ぐと、俺の前のテーブルにことんと置いた。俺は椅子に座ると、カップに注がれた水を飲み始める。これが冷たい麦茶だったらなーと思いつつもせつかく出されたものなのでありがたく飲み干した。

ほんの少し笑い、おかみさんは再び鍋に向き直る。何かがコトコト煮えているのに、『食事を出せない』というのは疑問に思う人も居るだろう。じつと待ち続けていると隣の部屋に続くドアの向こうから、こんこん、と子供が咳き込む声があった。それを聞いたおかみさんが悲しそうに肩を落とす。

さらに数秒待ったところで、ようやくおかみさんの頭上に、金色のクエストチョンマークが点灯した。クエスト発生のはずみなので、俺はすかさず声を出す。

「何かお困りですか？」

これで、クエストを受けられる筈だ。これで駄目だったら、なんかそれっぽいフレーズをひたすら言うしかない。

ゆっくり振り向くおかみさんの頭上で、クエストアイコンマークがピコピコ点滅する。どうやら、無事にクエストを受ける事が出来そうだ。

「旅の剣士さん、実は私の娘が・・・」

ざっくり説明すると、娘が重病にかかって市販の薬じゃ治らんから、捕食植物の胚珠から取れる薬を飲ませるしかないから、お前がその胚珠を取ってきたら、先祖伝来の長剣をお前にやるといわわけだ。

これを身振り手振り交えて長々と話している間にとりあえず、今日の事を考えよう。

まず、このクエストのクリアするにはリトルネペントの胚珠というアイテムをおかみさんに渡さなければならぬ。で、このリトルネペントの胚珠だが、花つきのリトルネペントからしかドロップしない。そして花つきリトルネペントの出現率は1%以下だ。

普通のリトルネペントでも、倒し続けていれば花つきの出現率が上がるので、戦闘は無駄ではないのだが、1つだけ注意しなくてはいけない事がある。

それが、花つきと同じくらしい確率で丸い実をつけているリトルネペントが出現するのだ。厄介な事にこの実つきのリトルネペントは戦闘中に実を攻撃してしまうと巨大な音と共に破裂し、周囲のリトルネペントを呼び寄せてしまうのだ。リトルネペントの

レベルは3なのでレベルは上だが、囲まれたらひとたまりもない、というか死ぬ。

そんな事を考えている内にやっとおかみさんの説明が終わった。視界の左中央の口グのタスクが更新された。

「分かりました。俺が取ってきますね」

こんな事を言う必要は無いんだが、そこら辺は気分の問題である。

俺は《ホルンカ》にあると門を潜り、不気味な夜の森へ足を踏み込んだ。

「お、居た居た」

森の中を走っている俺の視界に、カラー・カーソルが表示された。スキルスロットにセットした《索敵》によって反応距離が増加しているので、本体はまだ視認出来ないが、カーソルの色はモンスターを示す赤。つまり、敵だ。

一度、周囲に他のモンスターが居ない事を確認した俺は、《索敵》に反応したモンスターに向かって走り出す。

小径から逸れ、大きな古木を回り込むと、ソイツの姿が眼に入った。

ウツボカズラ（ネペテス）を思わせる動体の下部で、移動用の根が無数に蠢いている。左右には鋭い葉を備えたツルがうねり、頭にあたる部分では捕食用の口が粘液を垂らしながらパクパク開閉する。

間違いない、今から凄くお世話になるリトルネペントなのだが・・・

「ハズレだな」

口の上にあるのは花でも実でもなく双葉なので、普通のリトルネペントだ。

俺は背中 of 剣を抜き、リトルネペントに近づくとリトルネペントも俺に気づき、2本のツルを威嚇するように高々と掲げた。

リトルネペントの攻撃方法は、先端が短剣状になったツタによる切り払いと突き、そして口から吐く腐食液だ。

「シューウウウー」

リトルネペントが捕食器の口から咆哮を漏らし、右の突き込んできた。瞬時に軌道を見切った俺は左に跳んで回避すると、そのままリトルネペントの側面に回り込んで、リトルネペントの弱点であるウツボ部分と太い茎の接合部に剣を叩き込む。

充分な手応えと共に、リトルネペントのHPバーがぐつと3割程減少する。

再度怒りの声を上げ、リトルネペントはウツボをぶくつと膨らませた。腐食液発射の予備動作だ。射程は5mくらいあった気がするので、真後ろに下がっても避けられない。浴びればHPと装備の耐久力が大きく減るうえに、粘着力によってしばらく動きが阻害される。ならば・・・

「ハッ」だー」

ウツボの膨張が止まった瞬間、思いきり右に跳ぶ。

腐食液は射程距離が長い代わりに効果範囲は狭い。

ぶしゅっ！と薄緑色の液体が飛沫状に発射されるが、俺に1滴たりとも当たる事なく、地面に落ちて白い蒸気を上げる。

着地した瞬間に剣を右に大きく引いた。一瞬のタメ動作によってソードスキルが発動し、スモールソードの刀身を薄水色の光が包む。

「……うらっ！」

激しく地面を蹴り、単発水平斬撃技である《ホリゾンタル》で剥き出しの茎を直撃させた。蹴り足をと右腕の動作で威力を最大限までブーストさせた《ホリゾンタル》は硬い茎に食い込み、一瞬な手応えを残してウツボ部分と茎を切り離し、リトルネペントのHPを0にさせた。

リトルネペントが結晶片となって四散し、経験値の加算表示が浮き上がるがそれには目も暮れず、周囲を見渡す。

索敵範囲内に、リトルネペントと思われるカーソルが複数浮かぶが、プレイヤーのカーソルはまだ見えない。

花つきも早いところ見つけたいがそんなにすぐ出てくるとは思えない。ならば、誰かが来る前に1体でも多くぶつ倒し、少しでも経験値を稼ぎたい。

「次は……アイツにするか」

索敵範囲内の中で一番近そうな奴に狙いを定めると俺はそこに向けて走り出すのだった。